

齢数千歳の幼女趣味魔導師が不老不死幼女のストーカーをする話

宮下

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

爺の皮を被つた口リコン魔導士がメイビスをストーカーするだけのゆるい話。

1人称と3人称が1話の中に混在してますがご了承ください。

X      X  
6      6  
7      7  
9      9  
—      —  
0      0  
2      1

目

次

7      1

# X 679—01

これは最も古くから生きる罪人が、最も救われていた約一〇〇年間の物語。

——X 679年。天狼島。

私、メイビス・ヴァーミリオンはいつものようにマスターの命令を受けて、魔導士ギルド【赤い蜥蜴】の前の道を箒で掃いていた。せつかく貰った靴を取り上げられ捨てられてしまい、思わず涙を流しそうになる。

死んでしまったお父さん、お母さんには泣けば妖精に会えなくなると言わっていたから、私は笑つた。

そうすれば、いつか妖精に会えると信じて。

掃除が終わり、ギルドに戻ろうとした時だった。

「あうっ!?

振り返った瞬間、誰かとぶつかってしまい、箒を落として後ろに倒れそうになる。

けれど、私のお尻りは地面にぶつからず、何かに支えられているのが分かつた。

「怪我はないかな? 配慮が足りなくてすまなかつたね」

顔を上げると、髭が豊かで優しそうなお爺さんが私を抱きかかえているのが分かつた。

お爺さんはゆっくりと私を立たせ、ポケットから飴玉を取り出して私に握らせる。

「これはお詫びだよ。それでは」

お爺さんは私の頭を撫で、ギルドの中へと入つていった。  
私はお爺さんに撫でられた頭を空いている方の手で触る。

お父さん達が死んでから、初めて誰かに頭を撫でてもらつた。私は  
そのことがとても嬉しくて、もつと道を綺麗にするため、箒を拾つて  
気合を入れ直した。

「ギルドマスターは何処かね？」

【赤い蜥蜴】を訪れた老年の旅人はギルドマスターを探す。

「なんだこのジジイ？」

「さあ、ボケて迷い込んだんじやねえのか？」

酒の入つた魔導士たちが声を上げて笑い出す。活気があつて良い  
と旅人はニコニコしていたが、奥にいたジーセルフは青い顔をしてい  
た。

「お前ら、ちょっと静かにしてろ！」

ギルドマスター、ジーセルフは笑つている者たちを怒鳴りつける  
と、旅人の前に恐る恐るといった様子で歩み寄つていった。

「お、お久しぶりです。お変わりないようで……。へへつ」

「前に会つたのは先代が現役だった頃だったかね。悪ガキだった君が  
立派になつたものだ」

「ハハハ……。お陰様で娘も生まれまして、今年で六つになりやす」

「そうか、一目会つて置きたいものだ。……それで本題だが、先代から

言い伝えられているかね？」

「そりや勿論です、あの秘宝には人を近づけないように。見張りも交代で」

旅人は満足げに頷き、ジーセルフの肩を叩く。

「お勤めご苦労。機会があれば仕事ぶりを国王に伝えておこう、【赤い蜥蜴】は良くやっているとね」

「あ、ありがとうございます！」

ペコペコと頭を下げるジーセルフを見て、ギルドの魔導士たちは顔を見合せた。

荒くれ魔導士をまとめ上げるジーセルフはギルド最強の男だ。そんな男が頭を下げているところなど、誰も目にしたことがない。

「そうだ、血の氣の多い今の若人がどれ程の実力が見てみたいのだが良いかね？」

「えつ……。それは、その……」

「良いかね？」

「は、はい！ もちろんでき！ ……おい、お前ら！ 全員表に出ろ！」

ジーセルフに怒鳴りつけられ、訳の分からぬままに表に出ていく魔導士たち。旅人は子供のように笑いながら、それに続いて外に出た。

ギルドから大勢の人が出てきて、私は簫を止めて道の端へと非難する。一体何があつたのだろう。私がギルドで働き始めてから初めて見る光景だつた。

ギルドの人に続いて、さつきのお爺さんが出てくる。

「さて、まずは街に被害が出ないようにせねばな」

お爺さんがそう呟くと、半透明の壁がお爺さんとギルドの人たちを包み込んだ。

「さあ、何処からでもかかつてきなさい。先手は君たちに譲ろう」

ギルドの人たちがざわつき、誰が、どうするかと押し付け合いになる。

「ふむ、いきなりで気が乗らないか。ではこうしよう」

お爺さんは懐から布袋を取り出し、地面へと放り投げた。紐が解け、中から大量の金貨が道端へ広がる。

「ワシに攻撃を当てる者にはそれを全てやろう。全員に、それと同額だ。どうだ、やる気がでたかね？」

ギルドの人たちの目が変わった。

さつきまで押し付けあつていたのが嘘のように、一斉にお爺さんにむけて魔法で攻撃を始める。

私は思わず目を瞑った。

爆発する音、叩きつける音、人の悲鳴。思わず耳を塞ぎたくなつてしまふけれど、それが数秒もするとピタリと止んだ。

「はつはつは、まだまだひよっこ。これでは爺の遊び相手は務まらん」

お爺さんの楽しそうな笑い声に私は目を開けた。

「ぶふつ!？」

私は目の前のおかしな光景に思わず吹き出してしまった。

ギルドの人たちは奇妙な着ぐるみ姿に変えられていたり、巨大なケーキに蠟燭のよう刺さっていたり、リボンで蝶々結びにされたりと、面白おかしく一人残らず倒されていた。

お爺さんが手を何度も叩くと、着ぐるみやケーキは消えてギルドの人たちがその場に投げ出される。

「君はどうする?」

お爺さんが私の方に振り返り、そう聞いてくる。  
半透明の壁は消えていた。

ギルドの人たちを倒したお爺さんだけど、私は全く怖いとは思わなかつた。

私にはお父さんたちの借金をマスターに返す義務がある。

お爺さんの方にゆっくりと歩き、触れられる位置まで近寄る。

「……えいっ！」

お爺さんの足に、私は握り拳を突き付けた。お爺さんは不思議そうに首を傾げる。

「確か、攻撃を当てれば良いのですよね？ 私はまだ魔法が使えない  
ので、これが精一杯の攻撃です」

お爺さんは私の言葉を聞いて、呆気に取られたような顔をしたかと思うと私の頭を撫てる。

「通りで魔力の流れを感じなかつた訳だ、一本取られたよ。これは君のものだ」

お爺さんはいつの間にか持っていた袋を、飴玉と同じように私に渡す。ずつしりとした重みが伝わってきた。

私はまた嬉しくなつて、思わず裸足で駆け出した。

「マスター！ これでお父さんとお母さんの借金、大分返せますよね！」

ギルドの入り口に立っていたマスターはとても青い顔で震えていた。一体どうしてだろう？

# X 679—02

この日、私の環境は劇的に変わった。

マスターは布袋から金貨を半分だけ取り出すと、残りを私に返して、

「これでお前の両親の借金はチャラだ、ギルドに残るのも出ていくのも好きにしろ」

お爺さんと出会った次の日、私は初めてギルドの仕事をしなかつた。

急な話で、夢でも見ているようだ。

けれど、私の手にある布袋が昨日のことが夢ではないことを教えてくれる。

「お嬢さん、その額の金貨を持つて一人でいるのはギルドの近くでも危ない」

「お爺さん！」

いつ現れたのか、昨日のお爺さんが私の横に座っていた。

「ジーセルフに君のことを聞いた。全く、親の残した借金くらい目を瞑るのが大人の対応だろうに」

「いえ、マスターは良い人です。私に住む場所も、食べるものも用意してくれました。お父さんとお母さんがいなくなつた私にも居場所をくれたんですから」

お爺さんは目を丸くする。少し涙ぐんでいるようにも見えたけれど、それよりも私はお爺さんの手に現れた見たこともない食べものに目を奪われた。

「なんですかそれ？ もしかして魔法ですか！」

「ワシが半年ほど前に城下町で食べたケーキを再現した。頑張つてきました君にご褒美だ」

「ありがとうございます！」

私はお爺さんから貰ったケーキを食べる前に観察する。

再現したと言っていたけれど、どうやつてだろう？ スポンジには薄い紙のようなものが張り付いている、手が汚れないようだらうか。

宝石のように色鮮やかなケーキは、記憶の中の誕生日ケーキと同じくらい美味しいように見えた。

崩れた様子もなく、持ち運んでいたように見えない。こちらをジツと見ているお爺さんと目が合う。

「お爺さんはもしかして、妖精さんですか？」

「妖精？ うーむ、生きた年月は純粋な妖精に勝るとも劣らないが……。ワシは自分を人間だと思っているよ」

「そうですか、ちょっと残念です」

少しもつたいない気がしたけれど、私はケーキを一口食べてみる。それがとても甘くて、幸せで。

「…………あれ？」

自分のほっぺたを触ると、何かで濡れていた。

指で水跡を追つて、ようやくそれが涙だと気づいた。

「おかしいです。とても美味しいのに、嬉しいのに……。な、泣いたら妖精さんに会えなくなってしまいます。止めないと……」「妖精が好きなのかね？」

「グスつ。まだ、会ったことはないんですけど。お話の中で見て、それ

で……」

「ワシはこう見えて友好関係が広くてね。妖精の友もいる。君が清く正しく生きるのなら、またこの島に訪れる際に連れてこよう」

「えつ、本当ですか！」

「早ければ三年……。遅くとも八年以内に。ただワシは時間の流れに疎くてね、これを持つていなさい」

お爺さんは綺麗な指輪を私の左手の小指に嵌める。

「これをしていれば約束の時間は必ず守られる。君の居場所も分かるから、もし島を出でいても、約束は守ろう」

「わあ……！」

私は右手を空に翳しながら指輪を見る。知らない文字のようなものが彫られた、銀色の指輪だ。中心には小さな魔水晶が埋め込まれていた。

「ふふつ、楽しみです。……あの！ 妖精さんがどのような方が聞いても良いですか？」

「ああ、お安い御用だ」

お爺さんの話はどれも面白くて、私の知らないことばかりだった。話が止まると、素敵な魔法を見せてくれた。ギルドでは見たことのない、温かくて優しい魔法。

あつという間に時間は過ぎていく。このままずっと話し続けたい、そう思つた私の前にひとりの女の子が現れる。

名前はゼーラ。マスターの子供で、私と同い年の女の子。

「メイビス、こんなところで何サボつてゐるのよ。パパに見つかつたらどうなるか分かつてるの？」

「私、今日はお仕事がお休みなの。マスターからも許可は貰つていて

「何それ、聞いてないんだけど！……ん？」

ゼーラが私の左手を見る。

「指輪……？ アンタ、いつの間にそんなものしてるのよ」

ゼーラは私の左手を掴み、お爺さんに貰った指輪を抜き取ろうと手を伸ばす。

駄目！ 私がそう叫ぼうとしたところで、ゼーラと私の間に大きな手が差し込まれた。

「コラ、喧嘩は良くない。君がジーセルフの子かね？」

「なによじじい。アンタに用はないんだけど」

「その指輪はワシがこの子にあげたものだ。それを取ろうとするなら、ワシは止めなければならない」

「じゃあもつとスゴい指輪を私にもちようだい！」

私はお爺さんの方を見た。

ゼーラは私にないものを全部持っている。家族も、綺麗な服も、学校の友達も。

お爺さんも、ゼーラに綺麗な指輪をあげるのだろうか。

何故だろう。私にはそれがとても嫌なことのように思えて、急いでその考えを頭の中から追い出した。

お爺さんは困った様に髪を撫で、ハツと思いついたように何処からかネックレスを取り出した。

「指輪はそれひとつしかなくてね。このネックレスで許してもらえないか」

私でも一目見て高価なものだと分かるものだつた。

ゼーラは口を尖らせながらも嬉しそうにネットクレスを首にかけ、ギルドの中へと走つていった。

お爺さんは私が見ていることに気づくと、息を大きく吐いてから笑つた。

「いやまいつた。ワシは滅多に装飾品を作らなくてね、その指輪以外持つていなかつたんだ。拾い物があつて助かつた」

「……あ。この指輪、お爺さんが作つたのですか？」

「ワシ手製の魔法の指輪だ。ある魔法が込められている。ネットクレスは旅の途中で拾つたものを売り損ねていたという訳だ」

それを聞いた途端、私は胸のつかえがスッと取れたような気がした。

「そうだ、まだ直接君の名前を聞いていなかつた。教えて貰つても良いかな？」

私は左手を胸に当て、右手を重ねてから大きな声で言う。

「メイビス・ヴァーミリオン！ それが私の名前です！ お爺さんの名前はなんですか！」

「アンブローズ。今では誰も覚えていないが、それがワシの名前だ」

私は首を傾げる。マスターとも知り合いみたいなのに、名前を誰も知らないとはどういうことだろう。

私が質問する前に、お爺さんはニコリと笑つて私の疑問に答えた。

「知り合いには爺だの、大賢者だと呼ばれていてね。いつの間にか名前を知つている者がいなくなつてしまつた」

「なるほど……、お爺さんはとつても長生きなんですね。でも大丈夫ですよ。私、物覚えは良いのでお爺さんの名前は忘れません！」

「そうか。それはありがたい」

お爺さんはまた私の頭を撫でる。私にお爺さんがいたら、いつでもこうしてもらえたのだろうか。

ふと、お爺さんは手を止めて立ち上がった。

「さて、名残惜しいがそろそろ次の目的地へと行かなければならぬ」「えつ……？」

「大賢者、なんて呼ばれるだけあってワシが目をかけなければいけない場所は多い。この国だけでなく、他国まで行かなければならぬ時もある」

お爺さんは最後に、大きな瓶に詰められた飴玉を私に差し出してきた。

「メイビス、君との出会いに感謝を。これは細やかなお礼だ。またいつか会うのを楽しみにしている」

「お爺さん……。はいっ！ 妖精さんを連れてきてくれるのを楽しみにしていますね！」

お爺さんは優しく笑って、港へと歩いて行つた。

私は姿が見えなくなるまで手を振り続けて、見えなくなつたところでペタリと座り込む。

私の隣にはお爺さんがくれた、頭より大きな瓶があつた。一日一個食べてもいつ食べ終わるのかわからない。

これが無くなるころに、またお爺さんはこの島に来てくれるのだろうか。

私は瓶を抱えて、寝床まで走り出した。

お爺さんが旅立つて数日後のことだった。

「メイビス、これを学校まで行つてゼーラに届けてくれ」

マスターに二人分のお弁当を渡される。

今のは継ぎ接ぎだらけの服ではなく、地味ながらも小奇麗な服に変わっていた。

あのお金は全てマスターに渡して、ギルドのお仕事を続けている。ギルドの外に出ても何処に行けばいいのか分からなかつたし、お爺さんがこの島に来るならここで待つていた方が良いと思つたからだ。お金を受け取った時のマスターは珍しく目を白黒させ、翌日には新しい服を私にくれた。

食事も前より良くなつて、仕事も少なくなり、空き時間に本を読んでいても怒られなくなつた。きっとお爺さんのお陰だと思った。

ゼーラは相変わらずちょっと冷たいけれど、マスターに言いつけることが減つていた。

「学校ですか！ 分かりました、行つてきます！」

「弁当の片方はお前の分だ。適当に済ませておけ」

「……はいっ！」

学校、私は一度も行つたことがない。勉強をする場所ということは知つてゐるから、少しでもその光景を見てみたいと急いで駆けだした。

普段は入らない森に入り、何度かこけてしまいながらも学校までたどり着く。

まだ授業の時間だつたらしく、教室の中では私より少し年上の人たちが勉強している最中だつた。

とても楽しそうで、思わず見入つてみると見回りをしていた学校の先生に呼び止められる。

その時にゼーラが図書館にいることを教えてもらい、私はお弁当を届けに来たことを思い出して走つた。

図書館に入ると、ゼーラがあのネックレスを他の子たちに見せている所だった。

「いいなー、すごい綺麗」

「お父さんの知り合いに貰つたんですよ。ギルドマスターってお金持ちとも知り合いなの?」

ちやほやされて満更でもない様子だったゼーラだが、メイビスの姿を見つけ嫌そうな顔をする。

「メイビス？ なんでここにいるのよ」

「あ……、マスターに言われてお弁当を」

「遅い！ お昼を食べ損ねたらどうするのよ！」

ゼーラはバスケットを強引に私から取り上げると、不思議そうに中を確認する。

「ちょっと、なんで二人分も入つてるの」

「えっと、私の分も入つてあるみたい」

「……っ！ 要らない！ なんでメイビスと一緒にものを食べないといけないの！」

ゼーラがバスケットを床に叩きつけ、中身が床に落ちてしまう。

周りの子たちがゼーラにそんなことをして良かつたのかと聞くが、ゼーラは全く取り合わなかつた。

「……ごめんなさい」

私はバスケットの中に残つていた分を綺麗にまとめてテーブルに乗せ、床にあつたものを空いたバスケットに入れて図書館を出た。

森を歩き、海が見える丘まで着くと座り込む。

お弁当はぐちやぐちやになつてしまつたけれど、せつかくマスターに用意してもらつたのだ。汚れを払つてからそれを食べた。

お弁当を食べ終わると、ポケットからお爺さんに貰つた飴玉を取り出す。キラキラ光を反射する紙に包まれた飴玉は見ているだけで嫌なことを全部忘れられそうだ。

口に含むと、とても甘く、森を歩いた疲れも吹き飛ぶようだつた。天気も良かつたせいか、私はそのまま眠つてしまふ。

「——あれっ？」

目を覚ましたのは夕方になつてからだつた。今日はギルドで皿洗いの仕事がある、日の傾き加減からして急いで帰つても間に合うかどうか分からぬ。

慌てて立ち上がると、街の方から信号弾がいくつも上がつた。

「……？　どういう意味なんだろう？」

嫌な予感がする。私はギルドに向かつて走り出す。  
道はさつき覚えたため、かなり短い時間で街にたどり着いた。けれど、

「これは、どうして……？」

街は炎に包まれていた。ギルドの人たちが見知らぬ集団と戦つている。その中に、マスターの姿も見えた。

私はどうしていいかわからず、マスターに声をかけようとするが、

「——あ」

マスターは殺されてしまった。ギルドの人たちも、街の人たちも、

次々と死んでいく。

逃げなければ。そう思つた私だが、お爺さんに貰つた瓶が廐に残つていることを思い出した。燃える街を誰にも見つからぬように走る。

マスターの家にたどり着くと、家は倒壊していて見る影もなかつた。

「ゼーラ！」

ゼーラが瓦礫に挟まれ、倒れているのを見つけた。  
あちこちを怪我している。助けないと。

「メイ、ビス……？」

ゼーラが私に気づいた。

「（）にいたら殺さちゃう！　逃げよう！」

なんとか瓦礫の中からゼーラを助け出して、私は手を握り引っ張る。けれど、

「いや……、街から離れたくない」

ゼーラは立ち上がらない。

「パパがいるから、お洋服もまだ家の中にある。あのネックレスも、大切にしまつたのに……」

見れば、ゼーラの首にはネックレスがなかつた。私は小指から指輪を抜いて、ゼーラに握らせる。

「お爺さんが約束してくれたの。いい子にしていれば、妖精と会わせてくれるつて。ゼーラも一緒に会おう？ 生きてなくちゃ、楽しむことも、悲しむことも出来ないんだから。だから生きよう、ゼーラ！」  
「アンタ、これ……！」

ゼーラは私の顔と指輪を交互に見て、目を丸くしていた。

「お爺さんが言つてたの。それは魔法の指輪だつて。きっと助かるから、早く！」

ゼーラは立ち上がり、私はその手を引いて森へ走った。  
私は一度だけ廻の方を見た。お爺さんにもらつたものがなくなつてしまふ。けれど、もうつたことはばつと覚えていられる。

「私、アンタにひどいことばっかしてきたのに……」

「確かに何度も泣きそうになつたけど、今はもう気にしてないよ」

「ハハ……。ねえ、メイビス？」

街の方から爆発音が聞こえる。

「こんな私でも、メイビスの友達になれるかな？」

友達……、私と……？

私は思わず足を止めた。ゼーラの言葉があまりにも嬉しくて、こんな時なのに思わず笑ってしまう。

「うん……！ 私と、友達に——」

振り返ると、ゼーラが倒れていた。

「ゼーラ……？ ゼーラ！」

私は倒れたゼーラの身体をゆすつて起こそうとする。

ゼーラは返事をしてくれない。繋いでいない方の手から、魔法の指輪が転がり落ちていた。

私はそれを拾い上げてきつく握る。

どうか、誰でもいいからゼーラを助けてください。そのためなら、妖精さんと会えなくなつても構いません。そう、願つた。

「えつ……」

手を開くと、指輪が砕けていた。強く握り過ぎた……？ どうした

ら、どうして。私の頭の中はぐちやぐちやになつてしまふ。ポンつと、何かに触れられ、ぐちやぐちやだつた頭の中がスッと晴

れた。

「やあメイビス、急なことだつたからこんな姿で失礼するよ」

顔を上げると、知らない男性が私の頭に手を置いていた。けれど、私はこの手を知つている。

「もう大丈夫だ。君たちは助かる。ワシはこんな形でも大賢者だからね」

「お爺さん……？」

「はつはつは。人と会うときはそれらしい姿でいるようにしているんだがね。名前も本当の姿も、知つているのは君だけだ」

お爺さん。アンブローズがゼーラに触れると、瞬く間に怪我が消えて、苦しそうだつた表情も安らいでいく。

「お爺さん、ゼーラは？」

「危ない所だつたが今は眠つているだけだ」

お爺さんは立ち上がり、街のある方角を見る。

一見分からぬが、少しだけ険しい表情をしていた。それも少しのことで、お爺さんは会った時の姿に変わると優しく笑つた。

「約束を破つてしまつた。次に会うときは妖精を連れてくる約束だつたのに」

「……っ！」

ちゃんと約束を守ろうとしていてくれたのが嬉しくて、私はお爺さんに抱き着く。

「大丈夫です。お爺さんも、私にとつては妖精さんです」

街の人たちは私とゼーラ以外、全員死んでしまつた。

目が覚めたゼーラはお爺さんの姿にびっくりして、けれどすぐに落ち込んで悲しそうな顔になる。

お爺さんはそんなゼーラを見て、色とりどりのお菓子を出して元気づけようとしていた。

果てはぬいぐるみや洋服まで出し始めて、ゼーラが慌てて止めに入る。

島には子供が二人だけ。お爺さんは私たちが独り立ち出来るまで島に留まつてくれることになつた。

お爺さんの魔法で、私もゼーラも笑顔になる。

生きることを諦めなくて良かつた。私とゼーラはそう言つて笑いあつた。